軍師・参謀を志す人のために

Vol.25

―テレビ局の取材を受けたけれど―

テレビ局の取材を受けたけれど

1　テレビ局による取材　5
2　印象形成のポイント ― 服装 ―　11
3　話す内容よりも態度こそが重要　13
4　事前の準備を丁寧に　17

現代の「軍師・参謀」と呼ばれる人々は、各界において、指導者（リーダー）の活躍やその目標とするところへの到達を、「知恵」によって支えています。

この小冊子は、将来このような「軍師・参謀」的な役割を務めたいという志を持つ若いかたがたのために、その志の実現に向けた一つの足がかりを提供できないかと考えて制作しました。

この小冊子が、将来の「軍師・参謀」たらんことをめざすかたがたにとって、『手引書』のような感じで気楽に読んでいただけるものとなれば幸いです。

こくじょうさんちゅうの　しょうかく
穀　城　山　中　樵　客

1　テレビ局による取材

◇ 区切りとなったコミックマーケット 90 での取材

お手にとっていただいたこの本を制作しているサークル、「軍師・参謀を志す人のために」は、「軍師・参謀」 的な役割の実践にまつわる、さまざまな課題の考察・検討を続けています。そして当サークルでは、この考察や検討の成果を一続(ひとつづ)きの小冊子シリーズとしてまとめて2006年夏開催のコミックマーケット70以来、累次コミックマーケットにて頒布してきました。*1

この小冊子シリーズは、前回のコミックマーケット90*2 に合わせて刊行した新刊をもって一応の区切りをつけることとなりました。当サークルが発行を続けてきた小冊子は数えて25号（増刊号含む）となり、その間、皆さんから個々の作品へのご意見・ご感想などを、たくさんいただいてきました。あらためて厚く御礼申し上げたいと思います。

さて、このような、サークル活動の区切りとなったコミックマーケット参加の回で、さらに当サークルにとって大きな出来事(できごと)が起きたのです。それは、会場内で当サークルがマスコミから取材を受けるというものでした。

◇ 取材対応の失敗

ところがその取材への当方の対応は、「軍師・参謀を志す人のために」などという、たいそうな名前の本を出しているサークルには全く似つかわしくない、いかにも稚拙なものだったのです。取材を通じてサークルの活動趣旨を広く知っていただける機会をせっかく得ながら、当方のマスコミ対応の策は、客観的に見て「失敗」だったと言わざるを得ない結果に終わりました。

---

*1：各冊子とも、それぞれ独立した内容であり、途中の巻から読んでも、わかり易い別個の記述・内容としています。

*2：サークルの出展は2016年8月14日でした。

今回発行するこの小冊子は、将来「軍師・参謀」的な役割の仕事を務めたいと志している読者のかたがたに、皆さんの反面教師となるであろうこの失敗事例をご紹介することで、皆さんの今後の策の検討や展開に少しでもお役に立つことができればとの考えでとりまとめてみたものです。

◇ 取り上げてくれた番組

2016年8月30日火曜日の25時55分（つまり、翌31日の午前２時前）から26時55分にかけて、フジテレビにて「オタカル最前線2016夏」という番組が放送されました。

この番組は、公式ツイッターによると「オタクカルチャーの最前線を探ることで今の日本が見えてくるかもしれないと信じているオタク報道番組です」とのことでした。番組は、ミュージシャンの西川貴教（にしかわたかのり）氏と、ニッポン放送アナウンサー吉田尚記（よしだひさのり）氏が進行役となって、コミックマーケット、世界コスプレサミット、ワンダーフェスティバルの状況などを紹介するというものでした。*3

この番組のコミックマーケットに関するコーナーでは、吉田アナウンサーが「みずからコミケの情報・評論ジャンルで見つけた、お気に入り本ベスト３」を西川氏に紹介しており、この中で、当サークルの発行した同人誌も取り上げられました。

コミケ90での吉田アナの「お気に入り同人誌」ベスト３は、番組の進行に沿って紹介された順に、次のようなものでした。

- 第３位　醤油手帖 職人醤油のすべて
  （職人醤油をテーマにしたレビュー大作）
  サークル：醤油をこぼすと染みになる

吉田アナはコミケ会場内でのロケにて、この同人誌を手に取りつつ

*3：コミックマーケット90では西川氏みずからも、8月12日金曜日に出展サークル側の一員として参加しておられました。また、吉田アナウンサーもコミックマーケットにサークル参加を続けておられ、自身のオタク知識をもとにした落語CDを頒布しています。

「装丁が素晴らしい」と述べ、サークル関係者に向かって、これだけ多種の醤油をどうやって味わっているのかという質問をしています。

この質問に対して同サークルの方は、「時間がないときは湯で割ってそのまま飲む」という趣旨の回答をしておられました。「湯で割ると醤油の塩分が和らぎ、さらに、高い温度によっていっそう香りが立つ」のだそうです。

- 第２位　当サークル 軍師・参謀を志す人のために Vol.24 *4

番組では、会場内ロケでのサークル関係者に対するインタビューは使用されませんでした（後述）。

- 第１位　WIPE OUT
  （さまざまな種類の紙ウェス（紙ぞうきん）が綴(つづ)られた、
  おそらく日本初の拭(ふ)ける同人誌）
  サークル：東SOKEN

会場内でこのサークル関係者に対し、吉田アナによりどのようなインタビューがあったのかは、不明です。

◇ 取材が本当に来てしまった

当サークルをめぐる、この番組の取材にまつわる一連の出来事の始まりは、コミックマーケット90当日の開会時間直前に当サークルのスペースを来訪した、吉田アナご本人と番組スタッフの方２～３名による、サークルメンバーらへの聞き取りリサーチでした。

しかしその時は、当サークルのメンバーたちとしては、『彼らは今日、コミックマーケットに参加している数多くのサークルの中から、取材対象を物色しているのであろうが、きっと、目当ての（もしくは、事前に連絡をつけておいた）大手壁サークル*5 を順番に訪れる途中に、

*4：コミックマーケット90での新刊。

*5：同人誌即売会などにおいて大きな会場の壁際に配置されるサークルのこと、またほとんどの場合超大手のサークルを意味する語。壁際は行列ができても他のサークルの邪魔になりにくい、在庫を置くスペースが多く確保できるなどの利点がある。従ってイベントの主催者により超大手のサークルが壁際に配置されることが多い。（日本語表現辞典 Weblio辞書より）

吉田アナの個人的な興味による思いつき程度でうちのサークルに立ち寄ったのであろう』というくらいの、ごく軽い認識でいました。

ところが、10時にイベントが開会されてからしばらくして、彼らが、実際に当サークルの取材に来てしまったのです。実は、今回の彼らの取材対象は、「評論・情報」のジャンルなのでした。後で番組を見ると、吉田アナはその冒頭で、コミケの「評論・情報」ジャンルには、「こんなことについての本を出そうと思っている人がいたんだ」という驚きが詰まっており、「ある意味コミケの最深部DNAが眠っていると言える」のだと紹介していました。

◇ サークル代表者のミス

しかし吉田アナやテレビの取材チームがこの日、当サークルのスペースに再びやってきた時、サークル代表（この小冊子の制作者）は、知り合いのサークルへの挨拶と自身の買い物のために、東京国際展示場の東館内を徘徊（はいかい）中だったのです。ご案内のとおり、当サークルが出展している「評論・情報」ジャンルは、（このジャンルを主なターゲットとしてコミックマーケットにやってくる、コアな趣味人もおられますが）どちらかというと、お目当ての二次創作の作品を購入した帰りである、午後１時を過ぎた頃から通路の人通りが次第に多くなる傾向があります。当サークル代表は、暇な午前中に挨拶等を済ませるべく、東館の端の方まで足を伸ばしていました。

そこへサークルメンバーからこちらの携帯に、至急の連絡が入ったのです。急いで自スペースへ戻ろうとしたものの、既に始まっていた男性向けサークルエリアの混雑を突破するのに時間がかかり、結局、サークル代表の帰着は取材開始に間に合いませんでした。*6 このため、テレビ取材にはやむなく、他のサークルメンバーが対応せざるを得なくなりました。

こうして、当サークル代表は自分のサークルに対するテレビの取材に遅れてしまうという失態を犯してしまいました。しかしこれによっ

*6：男性向けサークルの列に並んでいて遅れたわけではありません。

て、自分のよく知っている人（サークルメンバー）が、自分がよくわかっていること（サークルの活動や新刊の内容）について取材を受けている様子を、間近(まぢか)で客観的に観察できる、またとない機会を得ることができたのでした。

◇ 取材の様子を見守ることに

さて、当サークル代表が買い物等に出かけてしまい、そこにテレビ局の取材が来たので慌(あわ)てて代表に電話を入れたけれどもなかなか帰ってこないので、やむを得ずみずから取材に応じることになってしまったサークルメンバーの、取材対応振りはどうだったでしょうか。

このサークルメンバーとしては、まさか本当にテレビが取材に来るとは、思っていませんでした。そこへ不意打ちを食らったものですから、吉田アナによるインタビューは、取材に対応したこのメンバーのまったくの緊張のうちに始まりました。サークル代表は、こうしたインタビューの途中にサークル・スペースまで戻ってきたのですが、既にインタビューは佳境に入っているようです。やむなく、当サークル代表は周囲で取材の様子を見ている野次馬たちに混じって、そうした馬の一頭と化し、目立たないように見守ることとしたのです。

◇ インタビューでの残念なやり取り

吉田アナによるインタビューは、サークル活動の目的や小冊子刊行に至った背景、新刊の内容など多岐にわたるものでした。しかし、インタビューの受け手であるサークルメンバーは緊張のあまりか、吉田アナがインタビューする言葉をそのままに返すばかりだったのです。そのやりとりは、例えば次のようなものでした。

吉田アナ「軍師・参謀とは、リーダーの活躍を知恵で支える仕事をする人ですか」

サークルメンバー「ええ、リーダーを、知恵で支える仕事をする人です」

吉田アナ「そんな縁の下の力持ちになるにはどうすればいいかが書かれている本なのですね」

サークルメンバー「ええ、どうすればいいかが書かれています」

こんな「オウム返し」では、先に掲げたサークル「醤油をこぼすと染みになる」さんへのインタビューの回答の様子と異なり、まったく画(え)になりません。結果として、当サークルへのインタビューの状況は、番組では使われませんでした。

「醤油をこぼすと染みになる」さんの答え振りからは、一つ一つを湯で割ってまでして自分で飲んでみて醤油たちの個性を見極めようとする、醤油への「愛」が感じられました。これは、番組がコミックマーケットの「評論・情報」ジャンルに参加するサークルに求めている、同人活動のディープな姿を、わかりやすく見せてくれるものでした。

◇ 自信を持ち面白さを伝えることができなかった

コミックマーケット準備会による「コミケットアピール」には、取材に対しては「自信を持ち、同人活動やコミケットの面白さ等を伝えて下さい」とあります。こうした取材対応により、同人活動やその作品に対する世の中の理解を一層深めてもらいたいのだと思われます。

さらに、マスコミから取材を受けるサークルにとっては、的確な対応をすれば自サークルの活動を広く世間にアピールでき、これにより、サークル自体や個々の作品に対する良好なイメージが形成されるという効果も得られます（もちろん、それが本の売れ行きにも直結します）。こうしたことを考えれば、当サークルによる今回の取材対応には、反省すべき点がいくつもあったように思われます。つまり、準備会から期待されている、あるいは、当サークルとして獲得したい成果が、全く上がらなかったのです。

ところで読者の皆さんも、趣味や同人活動について、ご自身が個人としてマスコミによる取材を受けることがあるかもしれません。こうした事態への対応を、あらかじめ頭の中でシミュレーションしておくという観点から、当サークルによる失敗事例を出発点として、個人によるマスコミ対応の技法を少し検討してみていただければと思います。